

# 子どもを育てているのは誰？

杉浦真紀子

「一体、子どもを育てているのは誰なんだろう？」

ふと、こんな考えにとらわれてしまうことがあります。もちろん主として育てているのは親ですが、ある程度成長するとそれ以外の他者、例えば保育者もその一端を担うこととなります。私は、保育者として子どもの育ちにかかわってまだ間もない未熟者

ですが、時として子どものことを盲目的に考えていたり、保育の理想を追求しようとするあまりに、

「私こそが子どもを育てているんだ！」という錯覚に陥ることがあります。そんな狭まりがちな自分の視野に危険を感じた私は、自分を客観的に見つめ直すためにも、ちょっとした調査をすることを試みま

した。テーマは「子育てに関する保育者と親とのズレ」です。

私は、ある保育グループの保育者として週二日、子どもたちの保育実践に携わっていました。ここは親子で通園してくる場でしたので、保育者は親と接する機会に恵まれ、また親が子どもとかわつていく姿を垣間見ることも可能でした。そんな状況の中で、私はある一人の子どもに関する子育て（保育）をめぐって、その子の母親と自分との間に「何か違う（ズレている）なあ……」という違和感を抱き、その親の目前では自分の保育がしづらくなる、という体験をしました。しかし、この状態は子どもにとっても自分にとっても決して良くはないと思い、誰かに解決の糸口を提供してほしいと薬にもする気持ちでした。その当時は、私自身の思考が行き詰まっていて冷静な判断力に欠けていたし、周囲のス

タッフも同様に保育のやりづらさを感じていたので、私は少し頭を冷やす意味も込めて、この場以外の保育者が同様の問題を抱えているのか？ またその場合一体どのようにして問題を解決しているのか？ という外部の情報に素直に得たいという気持ちから、異なる現場の保育者の語りに耳を傾けてみることに決めました。

さて、保育者へのインタビューを遂行する前に、これまでに「子育てに関する保育者と親とのズレ」の周辺でどのような研究がなされているかをいろいろ調べてみました。いくつかの研究では、子育て意識（例えば子ども観、子育て方略、理想の子ども像、子どもに育てたい内容等）に関するアンケートに、保育者・親の両者が回答し、それらを比較しているものがありました。中には保育者に「親ならどう答えるのであろう」と親の気持ちを推測しても

らって回答させる研究もありました。これらの結果からは、親と保育者との子育て意識にはズレがあるということ、そして保育者は親とのズレを正確には把握していないということが明らかにされました。

しかし私がその時ちようど求めていたのは、保育者が子育てに関する親のズレをどのように認識しているのか、そして保育者が子育てに関する親とのズレを認識したときに、その状況をどのように解決（しようと）しているのかという、もつと保育者の立場に寄り添った提言でした。そこで、もうこれは保育者の生の声を聞くしかないと一大奮起して、幼稚園という新たな現場へ足を踏み入れるに至りました。

対象となった幼稚園は首都圏内の五園で、いずれも子どもの自発的な遊びを主体として保育をしている園です。お忙しい中、十八名もの保育者の方々が私の調査に興味を示して下さり、三十〜九十分のインタビューに快くご協力下さいました。この場をお

借りしてお礼申し上げます。本当にありがとうございます。ありがとうございました。

インタビューはかなり甘い構造（非構造化）で行われました。「子育てに関する保育者と親とのズレ」というテーマで自由に語っていただいたので、十八名の語りはそれぞれ独特なものになりました。私自身にとっては聞いているだけで楽しく、ためになり、励まされもしました。ある保育者の語りを聞いて、まるで悟りが開けたかのように気分が晴々としたこともありました。しかしこれは調査ですから、何らかの論理を導き報告をしなければならぬという使命に駆られて、私は大変苦心しながらも十八名の独自の語りを分析し、類似性・共通性を見つけ出しました。

まず、(1)「ズレ体験について」の語りを分析しました。「ズレ体験」とは、先に述べたように、子育

てに関して親に何らかの違和感を抱く体験のことを指します。具体的には、保育者はどのような場面で親とのズレを感じるのか、そして保育者はズレの要因をどのように捉えているのか、ということを検討しました。次に、(2)「ズレをいかにすべきかについて」の語りを分析しました。ここでは、保育者は親とのズレを認識してから、その状況をどのように解決(しようと)しているのか、ということを考察しました。

### (1)「ズレ体験について」の語りから

保育者はどのような場面で親とのズレを感じるのでしょうか。分析の結果から、大まかに分類すると次の四つの場面が挙げられます。

1. 親が子どもの発達の特徴を適切に捉えられていないと感じるとき

2. 親が子どもの養育者としての自覚に欠けてい

ると感じるとき

3. 親が子どもより自分の都合を優先していると感じるとき

4. 親が幼稚園の役割を誤解していると感じるとき

中でも「1. 親が子どもの発達の特徴を適切に捉えられていないと感じるとき」が保育者は一番親に対してズレを感じているようでした。

次に、保育者はズレの要因をどのように捉えているのかを詳細に追ってみましょう。保育者は、「親は自分の子を他の子と比較し、何かを出来ないことに焦燥感をおぼえる」「親は我が子かわいさゆえに子ど



もに期待しすぎたり、過大評価したりする」という  
親自身の要因を挙げ、だから親は子どもの発達の特  
性を冷静かつ客観的に捉えることができないのだ、

と考えているようです。また、保育者は、「親は幼  
稚園などの子どもの生活の場あるいは子どもの世界  
に介入する機会が少ない」「親の世代がいわゆる新  
しい教育観（新教育要領に基づく新学力観）には馴  
染みにくい」などの物理的・社会的要因を挙げてお  
り、それゆえに親は子どもの発達の特性を保育者と  
同様の感覚で理解することは困難であると考えてい  
るようです。そして注目すべきことは、多くの保育  
者が、「親は子どもの発達にそぐわない早期教育、  
能力・学力的な習い事を重要視している割には、幼  
稚園での保育には何ら不満がなく、賛成さえしてい  
る」という、親のアンビバレントな態度に対して非  
常に違和感を抱き戸惑いを感じているということだ  
です。幼稚園でやっているようなことが良いとしなが

らも、能力主義・高学歴社会に流された子育てをし  
ていることに対して、保育者はいらだちさえ感じて  
いるようです。

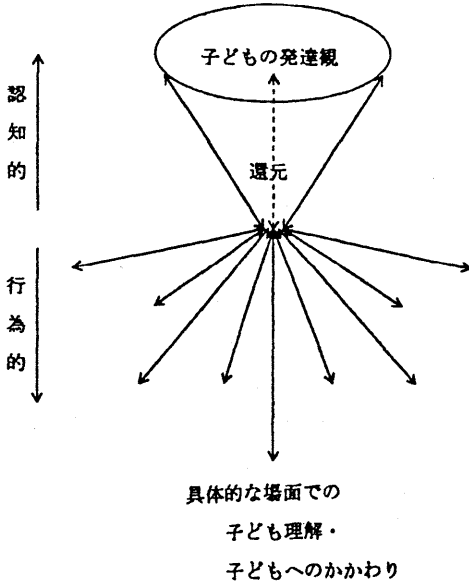
さて、ここで〈子育て観・保育観〉というものを  
考えてみましょう（図参照）。〈子育て観・保育観〉  
には「発達観」と「具体的場面における子ども理  
解・子どもへのかかわり」という二つの次元がある  
と想定します。「発達観」とは個人が持つ子育てに  
ついての考えであり、これは抽象的観念であるため  
に保育者は親の抱く「発達観」を正確には把握しき  
れないし、逆に保育者が「発達観」について親に伝  
えようとしても正確には伝えきれないということが  
起こり得ます。それに比べて、親の実際の言動と  
なつて表れる「具体的場面での子ども理解・子ども  
へのかかわり」は、保育者が実際に見聞することが  
できるためにズレ感も明確になり、ズレの要因を洞  
察しやすいようです。この図に保育者の語りを照ら

し合わせてみると、次のようなことが言えると思います。つまり、保育者が親に対して最もズレを感じるのは、親が幼稚園での保育に信頼を置いていないのではないかと、という不信感から、ひいては親の持つ「発達観」にまで不信が及ぶときなのではないでしょうか。保育者と親はこれらの二つの次元において歩み寄らない限りズレを感じ続けることになるのですが、ズレの本質は、「発達観」に関して両者が歩み寄ることが困難であるという点にこそあるように思われます。

(2) 「ズレをいかにすべきかについて」  
の語りから

保育者は親とのズレを認識してから、その状況をどのように解決（しようと）しているのでしょうか。保育者は親とのズレを認

図 子育て観・保育観の2つの次元



- 識したあとに、
1. 親に保育者・幼稚園側の考え方を伝える
  2. 親へ伝えることの難しさに悩む
  3. 親とのズレに対して気づきを得る
- という三つの行程を循環していることが分かります

た。

### 1. 親に保育者・幼稚園側の考え方を伝える

「この行程では「個々のずれに対して直接言う」「保育者・幼稚園の方針を話す」「子どもの成長の姿を伝える」「ベテランの保育者に代弁してもらう」という具体的な方略が語られました。しかし、大部分の保育者は「伝える」という一方向的なコミュニケーションに満足しているわけではなく、「悩む」行程も通過します。

### 2. 親へ伝えることの難しさに悩む

ここでは「保育者（話し手）のコミュニケーションスキル（技術）が未熟である」「親（受け手）のことを思いやるがゆえに言えない」「親に伝えるべき内容が難しい」「コミュニケーション不足」という、伝えることの難しさに関する悩みが語られました。しかし多くの保育者たちが、一方向的ではない

双方向的なコミュニケーションを目指していることがうかがえます。このようにいろいろ語りながらも自分なりに「気づき」を得る行程に移っていきま

### 3. 親とのズレに対して気づきを得る

ここでは「家庭と園との役割分担を明確にする」「親と保育者との揺るがない信頼関係を築く」「保育者は親を受容し、親の共感者となる」「親と保育者との新たな考え方を見出す」という様々な見解が得られました。これらの見解は、保育者がズレを感じたときに親に対して否定的な感情を持つのではなく、そのズレを肯定的に捉え直して新しい考えを共に創出する可能性を示していると言えるでしょう。そして、これらの行程を全体的に眺めてみることにより、保育者が自分自身の保育実践を振り返るきっかけを得ることができ、自分にとつての新しい動きの可能性が示唆されるところと考えられます。

私自身、保育実践をしながらこの調査を進めたわけですが、この調査を終えて考えたことがあります。

調査から明らかになった事実は、冷静に考えてみれば当然の事柄でいっぱいでした。しかし、日常生活に追われ、自分の保育にのめり込んで周囲が見渡せない状況下では、できて当然のことさえもできなくなってしまうということが、容易に起こりうるということでした。保育者は保育の理想を追求し、親がそれを理解してくれないと思ひ込み、「私こそが子どもを育てている！」という大錯覚に陥ってしまうと、子どもを一番近い位置で支えている親の存在が視野からすっぽり抜けてしまうのです。そのような状態では親との信頼関係は築けないし、信頼関係なくしては子どもにとって本当に良い保育というものができないことを、今回の調査で改めて気づかされました。

子どもを育てているのは、親だけでもなく保育者だけでもなく、周囲の人みんなが少しずつ力を分け合って育てているのであり、つまり保育は、子どもと親と保育者（そしてその他大勢の人）との均衡関係で成り立っていたんだなと、自明のことを再度突き付けられたのでした。

このような気づきこそが保育者にとって大変重要なのではないかと、私は何度も言いたいと思います。そして、私が調査から得た気づきが他の保育者の方々にとってはほんの少しでも気に留めていただけて、さらに自分の保育実践と照らし合わせていただけるのなら、私の費やした時間も無駄ではなかったのだろうなあ……と一人感慨にふける今日この頃です。

（駒場幼稚園）